

# 文づかひ

森鷗外

青空文庫



それがしの宮の催したまひし星ほしが岡茶寮おかさりようの独逸会ドイツかいに、洋行がへりの将校次を逐おうて身の上ばなしせし時のことなりしが、こよひはおん身が物語聞くべきはずなり、殿下も待兼ねておはすればと促されて、まだ大尉たいいになりてほどもあらしと見ゆる小林といふ少年士官、口に啣くわへし巻烟草まきタバコ取りて火鉢ひばちの中へ灰振り落して語りは始めぬ。

わがザツクセン軍団につけられて、秋の演習にゆきし折、ラアゲキツツ村の辺にて、対抗は既に果てて仮設敵を攻むべき日とはなりぬ。小高き丘の上に、まばらに兵を配りて、敵と定めおき、地形の波面なみづら、木立こだち、田舎家いなかやなどを巧たくみに楯たてに取りて、四方よもより攻せ

寄めよするさま、めづらしきみもの壯觀なりければ、近きん郷ごうの民たみここにかし  
こに群むれをなし、中に雑まじりたる少女おとめらが黒天鵝絨ビロードの胸みぞ 当晴ミーデルれがま  
しう、小皿こざ伏せたるやうなる縁狭ふちき笠かさに草花くさばな挿さしたるもをか  
しと、携たずさへし目めがね忙いそがはしくかなたこなたを見廻みめぐらすほどに、向むかひ  
の岡おかなる一群いちぐんきは立たちてゆかしう覚えぬ。

九月くがつはじめの秋あきの空そらは、けふしもここに稀まれなるある色いろになりて、  
空そら気透すきとお徹てつりたれば、残のこる隈くまなくあざやかに見ゆるこの群ぐんの真中まなか  
に、馬車ばしや一いち輛りやう停とめさせて、年若としわかき貴婦人きふじんいくたりか乗りたれ  
ば、さまざまの衣きぬの色相映しよくあやじて、花はな一いつ叢そう、にしき一団いつだん、目めもあ  
やに、立たちたる人の腰帶シエルベ、坐まりたる人の帽ぼうの紐ひもなどを、風かぜひら  
ひらと吹ふ靡なびかしたり。その傍かたわらに馬うま立たてたる白髪おきなの翁おきなは角扣つのボタン紐ひも

どめにせし緑のかりゆうどふく獵人服に、うすきかち褐いろの帽をいただ戴けるのみなれど、何となく由よしありげに見ゆ。すこし引下がりて白きこしま駒控へたる少女、わが目がねはしばしこれに留まりぬ。鋼鉄はがねいろの馬のり衣裾ごろもてなが長に着て、白き薄絹巻きたる黒帽子をかぶ被りたる身のかまえ構だけかく、今かなたの森蔭より、むらむらと打出でたる獵兵の勇ましさ見むとて、人々騒げどかへりみぬさま心憎し。

「殊ことなるかたに心留とめたまふものかな。」といひて軽く我肩わがを拍うちし長き八字髭はちじひげの明色ブロンドなる少年士官は、おなじ大隊の本部につけられたる中尉ちゆういにて、男爵だんしゃくフォン・メエルハイムといふ人なり。「かしこなるは我が識しれるデウベンはくの城のぬしビュロオ伯が一族なり。本部のこよひの宿はかの城と定まりたれば、君も

人々に交りたまふたつきあらむ。」と言<sup>いい</sup>畢<sup>おわ</sup>る時、獵兵やうやう

わが左翼に迫るを見て、メエルハイムは馳<sup>かけ</sup>去りぬ。この人と我が

交りそめしは、まだ久しからぬほどなれど、善<sup>よ</sup>き性<sup>さが</sup>とおもはれぬ。

寄<sup>よ</sup>手<sup>せて</sup>丘の下まで進みて、けふの演習をはり、例の審判も果つる

ほどに、われはメエルハイムと俱<sup>とも</sup>に大隊長の後<sup>しりえ</sup>につきて、こよひ

の宿へいそぎゆくに、中<sup>なか</sup>高<sup>ただか</sup>に造りし「シヨツセエ」道美しく切

株残れる麦畑の間をうねりて、をりをり水音の耳に入るは、木立<sup>こだち</sup>

の彼方<sup>あなた</sup>を流るるムルデ河に近づきたるなるべし。大隊長は四十の

上を三つ四つも躰<sup>こ</sup>えたらむとおもはるる人にて、髪はまだふかき

褐<sup>かち</sup>いろを失はねど、その赤<sup>あか</sup>き面<sup>おもて</sup>を見れば、はや額<sup>ぬか</sup>の波いちじるし。

質<sup>しつ</sup>樸<sup>ぼく</sup>なれば言葉すくなきに、一<sup>ふた</sup>言<sup>こと</sup>三<sup>み</sup>言<sup>こと</sup>めには、「われ一個人

にとりては」とことわる癖くせあり。遽にわかにメエルハイムのかたへ向き  
て、「君がいひなづけの妻の待ちてやあるらむ、」といひぬ。

「許し玉へ、少しょうさ佐の君。われにはまだ結いいなづけ髪いの妻といふもの  
なし。」「さなりや。我わがこと言をあしう思ひとり玉ふな。イイダの

君を、われ一個人にとりてはかくおもひぬ。」かく二人の物語す  
る間に、道はデウベン城の前にいでぬ。園そのをかこめる低てっさくき鉄柵  
をみぎひだりに結ひし真砂路まさごじ一線ひとすじに長く、その果つるところに  
旧ふりたる石門あり。入りて見れば、しろ木槿もくげの花咲きみだれたる  
奥しろつちに、白堊塗しろつちりたる瓦かわらぶき葺きの高どのあり。その南のかたに高  
き石の塔あるは埃エジプト及ピラミッドの尖ピラミッド塔ピラミッドにならひて造れりと覚ゆ。けふ  
の泊とまりのことを知りて出迎へし「リフレエ」着しもべたる下部に引かれて、

はくせききぎはし  
白石の階のぼりゆくとき、園の木立を洩るゆふ日朱の如く赤く、  
階の両側に蹲りたる人首獅身の「スフィックス」を照したり。  
わがはじめて入る独逸貴族の城のさまいかならむ。さきに遠く望  
みし馬上の美人はいかなる人にか。これらも皆解きあへぬ謎なる  
べし。

よも  
四方の壁と穹窿まるとんじょうには、鬼神竜蛇きじんりようださまさまの形を画き、  
「トルウヘ」といふ長櫃ながびつめきたるものをとどころどどころに据ゑ、  
柱には刻みたる獣の首けものこうべ、古代の楯たて、打物うちものなどを懸けつらねたる  
間ま、いくつか過ぎて、楼ろうじょう上に引かれぬ。

ビュロオ伯は常の服とおぼしき黒の上衣うわぎのいと寛ひろきに着更きがへて、  
伯爵夫人とともにここにをり、かねて相識れる中なれば、大隊長



と心よげに握手し、われをも引合はさせて、胸の底より出づるやうなる声にてみづから名告り、メエルハイムには「よくぞ来玉ひし、」と軽く会釈しぬ。夫人は伯よりおいたりと見ゆるほどに起居重けれど、こころの優しさ目の色に出でたり。メエルハイムを傍へ呼びて、何やらむしばしささやくほどに、伯。「けふの疲さぞあらむ。まかりて憩ひ玉へ。」と人して部屋へ誘はせぬ。

われとメエルハイムとは一つ部屋にて東向なり。ムルデの河波は窓の直下のいしづゑを洗ひて、むかひの岸の草むらは緑まだあせず。そのうしろなる柏の林にゆふ靄かかれり。流めての方にて折れ、こなたの陸膝がしらの如く出でたるところに田舎家二、三軒ありて、真黒なる粉ひき車の輪中空に聳え、ゆん手には水に

枕のぞみてつき出したる高たか殿どのの一ひと間まあり。この「バルコン」めきたるところの窓、打見るほどに開きて、少女のかしら三つ四つ、をりかさ畳たたなりてこなたを覗のぞきしが、白き馬に騎のりたりし人はあらざりき。軍服ぬぎてたらいづくえ盥せん卓たの傍よへ倚よらむとせしメエルハイムは、「かしこは若き婦人がたの居間なり、無な礼れなれどその窓の戸疾とくさしてよ、」とわれに請こひぬ。

日暮れて食堂に招かれ、メエルハイムと俱ともにゆくをり、「この家に若ひめき姫たちの多きことよ、」と問ひつるに。「もと六む人たりありしが、一人はわが友なるフアブリス伯とくに嫁とつぎて、のこれるは五い人たりなり。」「フアブリスとは國務大臣の家ならずや。」「さなり、大臣の夫人はここのあるじの姉にて、わが友といふは大臣

のよつぎの子なり。」

食卓に就きてみれば、五人の姫たちみなおもひおもひの粧よそおいしたる、その美しさいづれはあらぬに、上の一人の上衣も裳もも黒きを着たるさま、めづらしと見れば、これなんさきに白き馬に騎りたりし人なりける。外の姫ほかたちは日本人めづらしく、伯爵夫人のわが軍服褒ほめたまふ言葉の尾につきて、「黒き地に黒き紐ひもつきたれば、ブラウンシユワイヒの士官に似たり、」と一人いへば、桃色の顔したる末の姫、「さにてもなし、」とまだいわけなくもいやしむいろえ包までいふに、皆をかしさに堪たへねば、あかめし顔をソップ汁盛れる皿の上に低たれぬれど、黒き衣きぬの姫は睫まつげだに動うごさざりき。暫しばしありて穉おさなき姫、さきの罪購あがなはむとやおもひけむ、「されどか

の君の軍服は上も下もくろければイイダや好みたまはむ、「といふを聞きて、黒き衣の姫振向きて睨にらみぬ。この目は常にをち方ちかのみ迷ふやうなれど、一たび人の面おもてに向ひては、言葉にも増して心をあらはせり。いま睨みしさまは笑えみを帯びて呵しかりきと覚ゆ。われはこの末の姫の言葉にて知りぬ、さきに大隊長がメエルハイムのいひなづけの妻ならむといひしイイダの君とは、この人のことなるを。かく心づきてみれば、メエルハイムが言葉も振舞も、この君をうやまひ愛めづと見えぬはなし。さてはこの中なかにはビュロオ伯夫婦もここに許したまふなるべし。イイダといふ姫は丈高たけく瘦や肉せじしにて、五人の若き貴婦人のうち、この君のみ髪黒し。かの善くものいふ目まみをよそにしては、外の姫たちに立ちこえて美しとお

もふところもなく、眉まゆの間にはいつも皺しわ少しあり。面のいろの蒼あおう見ゆるは、黒き衣のためによ。

食終りてつぎの間にいづれば、ここはちひさき座敷ザロンめきたるところにて、軟き椅子いす、「ゾファ」などの脚あしきはめて短きをおほく据すゑたり。ここに珈琲カッフエーの饗もてなし応あり。給仕のをとこ小こさかず盞きに焼しょう酎ちゆうのたぐひいくつか注ついだるを持もてく。あるじの外には誰も取らず、ただ大隊長のみは、「われ一個人にとりては『シャルトリヨオズ』をこそ、」とて一息に飲みぬ。この時わが立ちし背のほの暗きかたにて、「一個人、一個人」とあやしき声して呼ぶものあるに、おどろきて顧かえりみれば、この間の隅にはおほいなる鍼はりがねの籠かごありて、そが中なる鸚鵡おうむ、かねて聞きしことあ

る大隊長のこと葉をまねびしなりけり。姫たち、「あな生憎あいにくの

鳥や」とつぶやけば、大隊長もみづからこわ高に笑ひぬ。

あるじ主人は大隊長と巻烟草喫のみて、銃獵はなしの話せばやと、小部屋カビネットの

かたへゆくほどに、われはさきよりこなたを打守うちまもりて、珍らし

き日本人にもいひたげなる末の姫に向ひて、「このさかしき鳥

はおん身のにや、」とゑみつつ問へば。「否いな、誰たれのとも定らねど、

われも愛めでたきものにこそ思はべひ侍れ。さいつ頃までは、鳩はとあまた

飼まっひしが、あまりに馴れて、身に縈まっはるものをイイダいたく嫌へ

ば、皆人に取らせつ。この鸚鵡のみは、いかにしてかあの姉君を

憎めるがこぼれ幸さいわいにて、今も飼はれ侍り。さならずや。」と鸚鵡

のかたへ首こうべさしいだしていふに、姉君憎むてふ鳥は、まがりたる

嘴はしを開きて、「さならずや、さならずや」と繰返しぬ。

この隙ひまにメエルハイムはイイダひめの傍いよに居寄りて、なに事をかこひ求むれど、洩しげりてうけひかざりしに、伯爵夫人も言葉を添へ玉ふと見えしが、姫つと立ちて「ピアノ」にむかひぬ。下部しもべいそがはしく燭しよくをみぎひだりに立つれば、メエルハイムは「いづれの譜をかまゐらすべき、」と樂器のかたはらなる小卓こづくえにあゆみ寄りむとせしに、イイダ姫「否、譜なくても」とて、おもむろにおろ指ゆび尖さき木端タステンに触れて起すや金石の響。しらべ繁くなりまさるにつれて、あさ霞がすみの如きいろ、姫が臉けん際さいに頭あれ来きつ。ゆるらかに幾尺の水晶の念珠ねんじゆを引くときは、ムルデの河もしばし流をとどむべく、忽たちまち迫りて刀槍とうそ齊みく鳴るときは、むかし行旅こうりよを

脅おびししこの城の遠とおつ祖おやも百年ももの夢を破られやせむ。あはれ、

この少女のこころは恒つねに狭き胸の内に閉ぢられて、こと葉となり

てあらはるる便たつきなければ、その織せん々たる指頭ゆびさきよりほとばしり

出づるにやあらむ。唯ただ覚ゆ、糸声しせいの波はこのデウベン城をただよ

はせて、人もわれも浮きつ沈みつ流れゆくを。曲正まさに闌たけになりて、

この楽器のうちに潜ひそみしさまさまの絃いとの鬼、ひとりびとりに窮きわな

き怨うらみを訴へをはりて、いまや諸声もろこえたてて泣響なきとよむやうなるとき、

訝いぶかしや、城外に笛の音ね起りて、たどたどしうも姫が「ピヤノ」

にあはせむとす。

弾だんじほれたるイイダ姫は、暫く心附かでありしが、かの笛の音

ふと耳に入りぬと覺にわかしく遽みだにしらべを乱りて、楽器の筐はこも碎くだくる



やうなる音をせさせ、座を起ちたるおもては、常より蒼あおかりき。姫たち顔見合せて、「また欠唇いぐちのをこなる業わざしけるよ。」とささやくほどに、外となる笛の音絶えぬ。

主人の伯は小部屋より出でて、「物くるほしきイイダが当座の曲は、いつものことにて珍らしからねど、君はさこそ驚きたまひけめ、」とわれに会釈しぬ。

絶えしものの音が耳にはなほ聞えて、うつつごころならず部屋かえへ還りしが、こよひ見聞しことに心奪はれていもねられず。床をならべしメエルハイムを見れば、これもまだ醒さめたり。問はまほしきことはさはなれど、さすがに憚はばるところなきにあらねば、

「ささきの怪しき笛の音は誰いが出だししか知りてやおはする、」と僅わずか

にいふに、男爵こなたに向きて、「それにつきてはひとつくたり一条のものがたりの語あり、われもこよひは何ゆゑか寝いねられねば、起きて語り聞かせむ。」と諾うべなひぬ。

われらはまだ煖ぬくまらぬ臥床ふしどを降りて、まどの下もとなる小机にいむかひ、烟草タバコ煙くゆらすほどに、さきの笛の音、また窓の外におこりて、乍たちまち断たえたちまち続き、ひな鶯うぐいすのこころみに鳴く如し。メエルハイムは警しわぶき咳せして語りいでぬ。

「十年ととせばかり前のことなるべし、ここより遠からぬブリヨオゼンといふ村にあはれなる孤みなしごありけり。六つ七つはやりのとき流行はやりの時疫はやりにふた親みななくなりしに、欠唇いぐちにていと醜みにくかりければ、かへりみるものなくほとほと饑うえに迫りしが、ある日麵包パンの乾きたるやある

と、この城へもとめに来ぬ。その頃イイダの君はとをばかりなりしが、あはれがりて物とらせつ<sup>もてあそび</sup>。玩の笛ありしを与へて、『これ吹いて見よ、』といへど、欠唇なればえ衝<sup>ふく</sup>まず。イイダの君、『あの見ぐるしき口なほして得させよ、』とむつかりて止<sup>や</sup>まず。母なる夫人聞きて、幼きものの心やさしういふなればとて医師<sup>くすし</sup>して縫<sup>ぬ</sup>はせ玉ひぬ。」

「その時よりかの童<sup>わらべ</sup>は城にとどまりて、羊<sup>ひつじ</sup>飼<sup>かい</sup>となりしが、賜<sup>たま</sup>はりしもてあそびの笛を離さず、後<sup>のち</sup>にはみづから木を削<sup>けず</sup>りて笛を作り、ひたすら吹きならふほどに、たれ教ふるものなけれど、自然<sup>ねいろ</sup>にかかる音色<sup>い</sup>を出<sup>いだ</sup>すやうになりぬ。」

「<sup>おとし</sup>昨年<sup>おとし</sup>の夏わが休暇たまはりてここに來たりし頃、城の一族と

ほ乗<sup>のり</sup>せむと出でしが、イイダの君が白<sup>こま</sup>き駒すぐれて疾<sup>と</sup>く、われのみ継<sup>つ</sup>きゆくをり、狭き道のまがり角にて、かれ草うづ高く積める荷車に逢<sup>あ</sup>ひぬ。馬はおびえて一躍し、姫は辛<sup>かろ</sup>うじて鞍<sup>くら</sup>にこらへたり。わがすくひにゆかむとするを待たで、傍<sup>かたえ</sup>なる高草の裏にあと叫ぶ声すと聞く間に、羊飼の童飛ぶごとくに馳<sup>はせよ</sup>寄り、姫が馬の轡<sup>くつわ</sup>ぎは緊<sup>しか</sup>と握りておし鎮<sup>しず</sup>めぬ。この童が牧場<sup>まきば</sup>のいとまだにあれば、見えがくれにわが跡慕<sup>あとした</sup>ふを、姫これより知りて、人してものかづけなどはし玉ひしが、いかなる故にか、目通<sup>めどおり</sup>を許されず、童も姫がたまたま逢ひても、こと葉かけたまはぬにて、おのれを嫌ひ玉ふと知り、はてはみづから避くるやうになりしが、いまも遠きわたりより守<sup>も</sup>ることを忘れず、好みて姫が住める部屋の窓の下に

おぶねつな  
小舟繋ぎで、夜も枯草の裡うちに眠れり。」

聞きき畢おわりて眠ねむりに就くころは、ひがし窓の硝子ガラスはやほの暗うなり  
て、笛の音も断えたりしが、この夜イイダ姫おも影に見えぬ。そ  
の騎のりたる馬のみるみる黒くなるを、怪しとおもひて善よく視みれば、  
人おもての面にて欠唇なり。されど夢ごころには、姫がこれに騎りたる  
を、よのつねの事のやうに覚えて、しばしまた眺めたるに、姫と  
おもひしは「スフィンクス」の首こくべにて、瞳ひとみなき目なかば開きたり。  
馬と見しは前足おとなしく並べたる獅子ししなり。さてこの「スフィ  
ンクス」の頭かしらの上には、鸚鵡おうむ止まりて、わが面を見て笑ふさまい  
と憎し。

つとめて起き、窓おしあくれれば、朝日の光対むこうぎし岸しの林を染め、

微風そよかぜはムルデの河づらに細紋をゑがき、水に近き草原には、ひと群の羊あり。萌黄色もえぎいろの「キツテル」といふ衣短く、黒き臙すねをあらはしたる童、身の丈たけきはめて低きが、おどろなす赤髪ふり乱して、手に持たる鞭面白むちげに鳴らしぬ。

この日は朝あしたの珈琲を部屋にて飲み、午頃ひる大隊長と俱ともにグリーンマといふところの銃獵仲間の会堂にゆきて演習見に來たまひぬる国王の宴うたげにあづかるべきはずなれば、正服着て待つほどに、あるじの伯は馬車を借して階きざはしの上まで見送りぬ。われは外国士官といふをもて、将官、佐官をのみつどふるけふの会に招かれしが、メエルハイムは城に残りき。田舎なれど会堂おもひの外ほかに美しく、食卓の器は王宮よりはこび來ぬとて、純銀の皿、マイセン焼すえの陶も

のなどあり。この国のやき物は東洋のを粉本ふんぼんにしつといへど、  
 染いだしたる草花などの色は、我邦くになどのものに似もやらず。さ  
 れどドレスデンの宮には、陶ものまの間といふありて、支那シナ日本の  
 花瓶はながめの類たぐいおほかた備れりとぞいふなる。国王陛下へいかにはいま始め  
 て謁見えつけんす。すがた貌かたちやさしき白髪おきなの翁おきなにて、ダンテの『神曲』  
 訳したまひきといふヨハン王のおん裔すえなればにや、応接たぐみいと巧たくみに  
 て、「わがザツクセンに日本の公使置かれむをりは、いまの好よしみに  
 て、おん身の来こむを待たむ、」など懇ねもごろきこに聞えさせ玉ふ。わが邦に  
 ては旧ふるきよしみある人をとて、御使おんつかい撰えらばるるやうなる例ためしなく、  
 かかる任に当るには、別に履歴ふんれきなうては協かなはぬことを、知ろしめ  
 さぬなるべし。ここにつどへる将校百三十余人の中にて、騎兵の

服着たる老将官の貌かたちきはめて魁偉かいいなるは、国务大臣フアブリース伯はくなりき。

夕暮に城にかへれば、少女おとめらの笑ひさざめく声、石門の外とまで聞ゆ。車停むるところへ、はや馴れたる末の姫走り来て、「姉君たち『クロケツト』の遊あそびしたまへば、おん身も夥なかまや、」とわれに勧めぬ。大隊長、「姫君の機嫌損じたまふな。われ一個人にとりては、衣脱ころもぎかへて憩いこふべし。」といふをあとに聞きなして随したがいゆくに、尖ピラミッド塔の下の園にて姫たちいま遊もの最中もなかなり。芝生のところどころに黒がねの弓伏せて植ゑおき、靴くつの尖さきもて押へたる五色ごしきの球たまを、小槌こづち揮ひて横よこ様に打ち、かの弓の下をくぐらするに、巧たくみなるは百に一つを失はねど、拙つたきはあや



まちて足など撃ちぬとてあわてふためく。われも正劍解せいけんいてこれに雑り、打てども打てども、球あらぬ方かたへのみ飛ぶぞ本意ほんいなき。姫たち声を併せて笑ふところへ、イイダ姫メエルハイムが肘ひじに指ゆびさき尖掛つばさけてかへりしが、うち解けたりとおもふさまも見えず。

メエルハイムはわれに向ひて、「いかに、けふの宴おもしろかりしや、」と問ひかけて答を待たず、「われをも組に入れ玉へ、」と群のかたへ歩みよりぬ。姫たちは顔見あはせて打笑ひ、「あそびには早倦はやうみたり、姉ぎみと共にいづくへか往ゆきたまひし、」と問へば、「見晴らしよき岩角わたりまでゆきしが、この尖塔ピラミッドには若しかず、小林こばやしぬしは明日わが隊とともにムツチエンのかたへ立ちたまふべければ、君たちの中にて一人塔いただきあないの顛へ案内し、粉

ひき車のあなたに、きしや 瀟車の烟見ゆるところをも見せ玉はずや、  
 といひぬ。

口疾ときすゑの姫もまだ何とも答へぬ間に、「われこそ」といひ  
 しは、おもひも掛けぬイイダ姫なり。物おほくいはぬ人の習ならいとて、  
にわかいだ  
 遽に出ししこと葉と共に、顔さと赤あかめしが、はや先に立ちて誘いざなふ  
 に、われは訝いぶかりつつも随ひ行きぬ。あとにては姫たちメエルハイ  
 ムがめぐりに集まりて、「夕餉ゆうげまでにおもしろき話一つ聞かせ玉  
 へ、」と迫りたりき。

この塔は園に向きたるかたに、窪くぼみたる階きざをつくりてその顔を  
たいらか  
 平にしたれば、階段をのぼりおりする人も、顔に立ちたる人も下  
あきらか  
 より明に見ゆべければ、イイダ姫が事もなくみづから案内せむと

いひしも、深く怪むあやしに足らず。姫はほとほと走るやうに塔ののほり上うへにゆきて、こなたを顧みたれば、われも急ぎて追付き、段の石をば先に立ちて踏みはじめぬ。ひと足遅れてのぼり来る姫の息せま促りて苦しげなれば、あまたたび休みて、漸ようよう上にいたりて見るに、ここはおもひの外に広く、めぐりに低き鉄欄干をつくり、中央に大なる切石一つ据ゑたり。

今やわれ下界を離れたるこの塔の顛にて、きのふラアゲキツツの丘の上より遙はるかに初対面せしときより、怪しくもこころを引かれ、いやしき物好にもあらず、いろなる心にもあらねど、夢に見、現うつつにおもふ少女と差向ひになりぬ。ここより望むべきザツクセン平野のけしきはいかに美しくとも、茂れる林もあるべく、深き淵ふち

もあるべしとおもはるるこの少女が心には、いかでか若<sup>し</sup>かむ。

険<sup>けわ</sup>しく高き石級をのぼり来て、臉<sup>ほお</sup>にさしたる紅<sup>くれない</sup>の色まだ褪<sup>あ</sup>せぬ

に、まばゆきほどなるゆふ日の光に照されて、苦しき胸を鎮<sup>しず</sup>めむ

ためにや、この顛の真中なる切石に腰うち掛け、かの物いふ目の

瞳をきとわが面<sup>おもて</sup>に注ぎしときは、常は見ばえせざりし姫なれど、

さきに珍らしき空想の曲かなでし時にもまして美しきに、いかな

ればか、某<sup>なにがし</sup>の刻みし墓上の石像に似たりとおもはれぬ。

姫はこと葉忙<sup>せわ</sup>しく、「われ君が心を知りての願<sup>ねがい</sup>あり。かくいは

ばきのふはじめて相見て、こと葉もまだかはさぬにいかでと怪み

玉はむ。されどわれはたやすく惑<sup>まど</sup>ふものにあらず。君演習済みて

ドレスデンにゆき玉はば、王宮にも招かれ國務大臣の館<sup>やかた</sup>にも迎へ

られ玉ふべし。」といひかけ、衣の間より封じたる文ふみを取出でて  
 われに渡し、「これを人知れず大臣の夫人に届け玉へ、人知れず  
 、」と頼みぬ。大臣の夫人はこの君の伯母御おばごにあたりて、姉君さ  
 へかの家にゆきておはすといふに、始めて逢へること国くに人の助びと  
 を借らでものことなるべく、またこの城の人に知らせじとならば、  
 ひそかに郵便に附しても善からむに、かく気をかねて希けう有うなる振  
 舞したまふを見れば、この姫こころ狂ひたるにはあらずやおも  
 はれぬ。されどこはただしばしの事なりき。姫の目は能よくものい  
 ふのみにあらず、人のいはぬことをも能く聞きたりけむ。分い疏わ  
 のやうに語を継つぎて、「フアブリス伯爵夫人のわが伯母なるこ  
 とは、聞きてやおはさむ。わが姉もかしこにあれど、それにも知

られぬを願ひて、君が御助みたすけを借らむとこそおもひ侍れはべ。ここの人への心づかひのみならば、郵便もあめれど、それすら独出ひとりづること稀なる身には、協かなひがたきをおもひやり玉へ。」といふに、げに故あることならむとおもひて諾うべなひぬ。

入日は城門近き木立より虹の如く洩りたるに、河霧たち添ひて、おぼろけになる頃塔を下れば、姫たちメエルハイムが話ききはててわれらを待受け、うち連れて新あらたにともし火をかがやかしたる食堂に入りぬ。こよひはイイダ姫きのふに変わりて、樂しげにもてなせば、メエルハイムが面おもてにも喜のいろ見えにき。

あくる朝ムツチエンのかたをこころぎしてここを立ちぬ。

秋の演習はこれより五日ばかりにて終り、わが隊はドレスデン

にかへりしかば、われはゼエ・ストラアセなる館をたづねて、さきにフォン・ビュロオ伯が娘イイダ姫に誓ひしことを果さむとせしが、固もとよりところの習にては、冬になりて交際の時節来ぬ内、かかる貴人あてびとに逢はむことたやすからず、隊附の士官などの常の訪問といふは、玄関かたえの傍なる一間に延ひかれて、名簿に筆染むることなればおもふのみにて罷やみぬ。

その年も隊務いそがはしき中に暮れて、エルベがは上流の雪消ゆきげにはちす葉の如き氷塊、みどりの波にただよふとき、王宮の新年はなばなく、足もと危あやうき蠟磨ろうみがきの寄木よせぎを踐ふみ、国王のおん前近う進みて、正服うるはしき立姿を拝し、それよりふつか三日過ぎて、国务大臣フォン・ファブリス伯の夜会に招かれ、奥太オースト

リア、バワリア、北亜米利加などの公使の挨拶畢りて、人々こほり菓子に匙を下す隙を覗ひ、伯爵夫人の傍に歩寄り、事のもと手短に陳べて、首尾好くイイダ姫が文をわたしぬ。

一月中旬に入りて昇進任命などにあへる士官とともに、奥のおん目見えをゆるされ、正服着て宮に参り、人々と輪なりに一間に立ちて臨御を待つほどに、ゆがみよろほひたる式部官に案内せられて妃出でたまひ、式部官に名をいはせて、ひとりびとりこと葉を掛け、手袋はづしたる右の手の甲に接吻せしめ玉ふ。妃は髪黒く丈低く、褐いろの御衣あまり見映せぬかはりには、声音いとやさしく、「おん身は仏蘭西の役に功ありしそれがしが族なりや、」など懇にもものし玉へば、いづれも嬉しとおもふなるべし。



したがひ来し式の女官は奥の入口の闕の上まで出で、右手に摺みたる扇を持ちたるままに直立したる、その姿いといと気高く、鴨居柱を欄にしたる一面の画図に似たりけり。われは心ともなくその面を見しに、この女官はイイダ姫なりき。ここにはそもそも奈何して。

王都の中央にてエルベ河を横ぎる鉄橋の上より望めば、シユロス・ガツセに跨りたる王宮の窓、こよひは殊更にひかりかがやきたり。われも数には漏れで、けふの舞踏会にまねかれたれば、アウグスツスの広こうちに余りて列をなしたる馬車の間をくぐり、いま玄関に横づけにせし一輛より出でたる貴婦人、毛革の肩掛を隨身にわたして車箱の裡へかくさせ、美しくゆひ上げたる

こがね色の髪と、まばゆきまで白き領えりとを露あらわして、車の扉開きし  
 劍つるぎ佩つるぎびたる殿守とのもりをかへりみもせで入りし跡にて、その乗りたり  
 し車はまだ動かず、次に待ちたる車もまだ寄せぬ間をはかり、槍  
 取りて左右にならびたる熊毛くまげ整かぶとの近衛卒このえそつの前を過ぎ、赤かき氈も  
 を一筋に敷きたる大理石マーブルの階きざをのぼりぬ。階ふたの両側がわのところど  
 ころには、黄羅紗キラシヤにみどりと白との縁取りたる「リフレエ」を着  
 て、濃こむらさき紫はかまの袴はを穿はいたる男、項うなじを屈かがめて瞬またもせず立ちたり。  
 むかしはここに立つ人おのおの手て燭しよく持つ習なりしが、いま廊下、  
 階段に瓦斯ガス燈用とうあることとなりて、それは罷やみぬ。階の上なる広  
 間まよりは、古いにし風えぶりを存ぞる弔つり燭しよく台たいの黄蠟おうろうの火遠く光の波  
 を漲みなぎらせ、数知らぬ勲章、肩かたじるし、女服の飾などを射やて、祖先

よよの油あぶらえ画の肖像の間に挟まれたる大鏡に照てりかえ反かえされたる、いへば尋常よのつねなり。

式部官が突く金総きんぶさついたる杖つえ、「パルケツト」の板に触れてとうとうと鳴りひびけば、天鵝絨ビロードばりの扉一時に音もなくさとあきて、広間のまなかに一条ひとすじの道おのづから開け、こよひ六百人と聞えし客、みなくの字なりに身を曲げ、背の中ほどまでも截きりあけてみせたる貴婦人の項うなじ、金糸きんしの縫模ぬいも様ある軍人の襟えり、また明ブロンドロンドの高髻たかまげなどの間を王族の一行よぎ過りたまふ。真先まきさきにはむかしながらの卷毛おおかずらの大仮髪おほかづらをかぶりたる舎人とねり二人、ひきつづいて王妃両陛下、ザツクセン、マイニンゲンのよつぎの君夫婦、ワイマル、シヨオンベルヒの両公子、これにおもなる女官数人したが随したがへり。

ザツクセン王宮の女官はみにくしといふ世の噂うわさむなしからず、い  
 づれも顔かお立たちよからぬに、人の世の春さへはや過ぎたるが多く、  
 なかにはおい皺しわみて肋あばら一つ一つに数ふべき胸を、式なればえも隠  
 さで出いだしたるなどを、額ひたい越こしにうち見るほどに、心こころ待まちせし  
 その人は来ずして、一行はや果てなむとす。そのときまだ年若き  
 宮女一人、殿しんがりめきてゆたかに歩みくるを、それかあらぬかと打うちあ  
 仰おげば、これなんわがイイダ姫なりける。

王族広間の上かみのはてに往ゆきつ着つき玉ひて、国々の公使、またはその  
 夫人などこれを囲むとき、かねて高廊への上に控へたる狙撃聯隊の  
 楽人がひと声鳴らす鼓つづみとともに「ポロネエズ」といふ舞まいはじまり  
 ぬ。こはただおのおの右め手てにあひての婦人の指をつまみて、この

間をひと周めぐりするなり。列のかしらは軍装したる国王、紅衣のマイニンゲン夫人を延ひき、つづいて黄絹きぎぬの裾引衣すそひきころもを召したる妃にならびしはマイニンゲンの公子なりき。僅わずかに五十対ついでばかりの列めぐりはるとき、妃は冠かんむりのしるしつきたる椅子に倚よりて、公使の夫人たちを側そばにをらせたまへば、国王向ひの座敷なる骨牌卓カルタづくえのかたへうつり玉ひぬ。

この時まことの舞踏はじまりて、群客たちこめたる中央の狭きところを、いと巧たくみにめぐりありくを見れば、おほくは少年士官の宮女たちをあひ手にしたるなり。わがメルハイムの見えぬはいかにとおもひしが、げに近衛このえならぬ士官はおほむね招かれぬものをと悟りぬ。さてイイダ姫の舞ふさまいかにと、芝居にて鼻眞ひいきの

俳わざおぎ優まもみるこちしてうち護りたるに、胸にさうびの自然花を梢こずえ  
 のままに着けたるほかに、飾といふべきもの一つもあらぬ水色ぎ  
 ぬの裳裾もすそ、狭き間をくぐりながち撓たわまぬ輪えがを画えがきて、金剛石こんごうせきの  
 露こぼ翻ひらるるあだし貴人の服のおもげなるを欺あざむきぬ。

時うつつ遷うつるにつれて黄蠟の火は次第すみに炭けの気におかされて暗うなり、  
 燭しよくるい 涙なながくしたたりて、床ゆかの上には断ちぎれたる紗うすぎぬ、落ちたるは  
 な片びらあり。前座敷の間ビュツフエー食卓にかよふ足やうやう繁こくびくなりたるを  
 りしも、わが前をとほり過ぐるやうにして、小首こくびかたぶけたる顔  
 こなたへふり向け、なかば開けるまおうぎひ扇おとがいに頤おとがいのわたりを持たせて、  
 「われをばはや見忘れやし玉たまひつらむ、」といふはイイダ姫なり。  
 「いかで」といらへつつ、二ふた足あし三あし足あし附あしきてゆけば、「かしこな

する陶物の間見たまひしや、東洋産の花瓶はながめに知らぬ草木鳥獸な  
ど染めつけたるを、われに釈ときあかさむ人おん身の外ほかになし、い  
ざ、」といひて伴ひゆきぬ。

ここは四方よもの壁に造付けたる白石の棚に、代々よよの君が美術に志  
ありてあつめたまひぬる国々のおほ花瓶、かぞふる指いとなきま  
で並べたるが、乳ちの如く白き、琉璃るりの如く碧あおき、さては五色まば  
ゆき蜀しよつきん錦しんのいろなるなど、蔭かげになりたる壁より浮うきいでて美  
はし。されどこの宮居みやいに慣れたるまらうどたちは、こよひこれに  
心留こころどむべくもあらねば、前座敷まへざしきにゆきかふ人のをりをり見ゆるの  
みにて、足をとどむるものほとほとなかりき。

緋ひの淡あき地ぢにおなじいろの濃こきから草織くさおり出したる長椅子ながいすに、姫

は水いろぎぬの裳のけだかきおほひだ襷の、舞の後ながらつゆくず頹れぬを、身をひねりて横ざまに折りて腰掛け、斜ななめに中の棚の花瓶を扇さきの尖もてゆびさしてわれに語りはじめぬ。

「はや去年こぞのむかしとなりぬ。ゆくりなく君を文づかひにして、るや申すたつきを得ざりければ、わが身の事いかにおもひとり玉ひけむ。されど我を煩ぼんのう悩やみじの闇路よりすくひいで玉ひし君、心の中かたときには片時はべも忘れ侍らず。」

「近ちかごろ比日本の風俗書きしふみ一つ二つ買はせて読みしに、おん国にては親の結ぶ縁ありて、まことの愛知らぬ夫婦多しと、こなたの旅人のいやしむやうに記したるありしが、こはまだよくも考へぬ言ことにて、かかることはこの欧羅巴ヨーロッパにもなからずやは。いひ



なづけけるまでの交際つきあい久しく、かたみに心の底まで知りあふ甲か妻いは否いなとも諾うともいはるる中にこそあらめ、貴族仲間にては早くより目上の人にきめられたる夫婦、こころ合はでも辞いなまむよしなきに、日々にあひ見て忌いむこころ飽あくまで募つりたる時、これに添ならはする習いさりとはことわりなの世や。」

「メエルハイムはおん身が友なり。悪しといはば弁護もやしたまはむ。否、我とてもその直すなる心を知り、貌かたちにくからぬを見る目なきにあらねど、年頃つきあひしすゑ、わが胸にうづみ火ほどのあたたまりも出来いでず。ただ厭いとふにはゆるは彼方あなたの親切にて、ふた親のゆるしし交際おもての表、かひな借さるることもあれど、唯二人になりたるときは、家も園もゆくかたもなう鬱陶いぶせく覚えて、ここ

ろともなく太き息せられても、かしら熱くなるまで忍びがたうなりぬ。何ゆゑと問ひたまふな。それを誰か知らむ。恋ふるも恋ふるゆゑに恋ふるとこそ聞け、嫌ふもまたさならむ。」

「あるとき父の機嫌好きをよ 覗うかが得いて、わがくるしさいひ出でむとせしに、気色けしきを見てなかば言はせず。『世に貴族と生れしものは、賤しずやまがつなどの如くわがままなる振舞、おもひもよらぬことなり。血の権の贄にえは人の権なり。われ老おいたれど、人の情なさけ忘れたりなど、ゆめな思ひそ。向ひの壁に掛けたるわが母君の像すがたを見よ。心もあの貌かおのやうに厳いしく、われにあだし心おこさせ玉はず、世のたのしみをば失ひぬれど、幾いく百年もとせの間いやしき血ひとし一滴しずくまぜしことなき家の誉ほまれはすくひぬ。』といつも軍人ぶりのこと葉つ

きあらあらしきに似ぬやさしさに、兼ねてといはむかく答へむとおもひし略<sup>てだて</sup>、胸にたたみたるままにてえもめぐらさず、唯<sup>ただ</sup>心のみ弱うなりてやみぬ。」

「固<sup>もと</sup>より父に向ひてはかへすこと葉知らぬ母に、わがこころ明<sup>あか</sup>し何にかせむ。されど貴族の子に生れたりとて、われも人なり。いまいましき門閥、血統、迷信の土くれと看<sup>みやぶ</sup>破りては、我胸の中に投入るべきところなし。いやしき恋にうき身<sup>やつ</sup>窶さば、姫ごぜの恥ともならぬど、この習<sup>ならわし</sup>慣<sup>と</sup>の外にいでむとするを誰か支ふべき。『カトリック』教の国には尼<sup>あま</sup>になる人ありといへど、ここ新教のザックセンにてはそれもえならず。そよや、かの羅馬<sup>ローマ</sup>教の寺にひとしく、礼知りてなさけ知らぬ宮の内こそわが冢<sup>つか</sup>穴<sup>あな</sup>なれ。」

「わが家もこの国にて聞ゆる族うからうなるに、いま勢ある国務大臣フアブリス伯とはかさなる好よしみあり。この事おもてより願はばいと易やすからむとおもへど、その叶かなはぬは父君の御みこころ心うごかしがたきゆゑのみならず。われ性さがとして人とともに歎なげき、人とともに笑ひ、愛憎二つの目もて久しく見らるることを嫌へば、かかる望をかれに伝へ、これにいひ継がれて、あるは諫いさめられ、あるは勧められむ煩わづらはしきに堪たへず。いはんやメルハイムの如く心浅々しき人に、イイダ姫嫌ひて避けむとすなどと、おのれ一人にのみ係ることのやうにおもひ倣なされむこと口惜くちおしからむ。われよりの願と人に知られで宮づかへする手立てだてもがなとおもひ悩むほどに、この国をしばしの宿にして、われらを路傍の岩木などのやうに見もすべ

きおん身が、心の底にゆるぎなき誠をつつみたまふと知りて、かねて我身いとほしみたまふフアブリス夫人への消しょうそこ息、ひそかに頼みまつりぬ。」

「されどこのひとくだけり一件のことはフアブリス夫人ここに秘めて族うからにだに知らせ玉はず、女官の鬪けついでん員あればしほしの務つとめにとて呼寄せ、陛下へいかのおん望のぞみもだしがたしとて遂にとどめられぬ。」

「うき世の波にただよはされて泳すべぐ術知らぬメエルハイムがごとき男は、わが身忘れむとてしら髪が生やすこともなからむ。唯ただ痛ましきはおん身のやどりたまひし夜、わが糸の手とどめし童わらべなり。わが立ちし後も、よなよな纜ともづなをわが窓の下に繋ぎて臥ふししが、ああしたる朝羊小屋の扉のあかぬにこころづきて、人々岸辺にゆきて見し

に、波虚しき船を打ちて、残れるはかれ草の上なる一枝いっしの笛のみ  
なりきと聞きつ。」

かたりをはるときごや午夜の時計ほがらかに鳴りて、はや舞踏の大お

おやすみ

休おやすみとなり、妃はおほとのごもり玉ふべきをりなれば、イイダ

姫あわただしく坐を起たちて、こなたへ差しめのばしたる右手の指に、

わが唇触るとき、隅の觀兵まの間に設けたる夕餉スパーに急ぐまらうど、

群立ちてここを過ぎぬ。姫の姿はその間にまじり、次第に遠ざか

りゆきて、をりをり人の肩のすきまに見ゆる、けふの晴衣はれぎの水い

ろのみぞ名残なりける。







# 青空文庫情報

底本：「舞姫・うたかたの記 他三篇」岩波文庫、岩波書店

1981（昭和56）年1月16日第1刷発行

1992（平成4）年3月5日第21刷発行

底本の親本：「鷗外全集第二卷」岩波書店

1971（昭和46）年12月刊

初出：「新著百種 第12号」吉岡書籍店

1891（明治24）年1月28日

入力：kompass

校正：土屋隆

2006年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 文づかひ

森鷗外

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>